

# 栃木県埋蔵文化財センターだより

発行 平成26年3月10日  
栃木県教育委員会  
宇都宮市埴田1-1-20  
TEL 028-623-3425  
編集 (公財)とちぎ未来づくり財団  
埋蔵文化財センター  
下野市紫474  
TEL 0285-44-8441  
FAX 0285-44-8445  
URL <http://www.maibun.or.jp>

2014  
3月  
やま  
かい  
どう



## CONTENTS

- 埋蔵文化財センターが実施した発掘調査から  
くるま橋遺跡(真岡市) 国分寺愛宕塚古墳(下野市)
- 市町教育委員会が実施した発掘調査から  
藤江古墳群(壬生町) 雲雀台遺跡(下野市)  
琵琶塚古墳(小山市)
- 埋蔵文化財センター普及事業  
総合学習への協力  
図書館での展示
- 特集 地面の下の遺跡

## 埋蔵文化財センターが実施した発掘調査から

### 1. くるま橋遺跡(真岡市) - 真岡鐵道から望む古代の集落 -

くるま橋遺跡は真岡市石島地内にある古墳時代から奈良・平安時代の集落跡です。2度の発掘調査で1,080㎡を調査しました。

確認した遺構は総数112基、約半分の56基が住居跡で、出土遺物から奈良～平安時代と判明しました。発掘調査では旧石器～平安時代と様々な時期の遺物が出土しました。そのほとんどが土師器や須恵器の破片でしたが、遺構に伴う遺物の中には残存状態の良い遺物が多く出土しました。



くるま橋遺跡の位置

特にカマドをもつ住居からは多くの遺物が出土しています。特徴的な出土例では、SI-112のカマドから灰釉陶器の皿が発見され、SI-124の二つ掛け口があるカマドからは10個体以上の益子と新治(筑波山南麓)の窯で焼かれたと思われる須恵器坏が出土したことが特筆されます。

また、今回石島地内にある三本松古墳の周溝を調査し、方墳であることが明らかになりました。三本松古墳の周溝内からは古墳時代中期頃のたかつき高坏が出土しています。



SI-112 灰釉陶器出土状況

カマド内から灰釉陶器の皿が出土しました。カマドの残存状況は悪く、構築材の粘土はカマドの周囲に崩れていました。



出土した灰釉陶器の皿



調査中の三本松古墳



SI-124 カマド

カマド内から多くの須恵器の破片が出土しました。坏の底部には記号が描かれ『丁』と漢字の『女』に似た記号が描かれているものもありました。

## 2. 国分寺愛宕塚古墳（下野市）－重要遺跡の現況範囲確認調査－

栃木県教育委員会では国の補助を受けて、県内に所在する重要な遺跡の現況調査を継続的に行っています。これまでに那珂川町的那須官衙跡や那須烏山市の長者ヶ平官衙遺跡、また栃木市と壬生町にまたがる吾妻古墳の調査などにおいて、極めて重要な成果が得られました。

平成24年度からは下野市国分寺に所在する国分寺愛宕塚古墳の調査を開始しました。当地域には栃木県を代表する大型の前方後円墳が集中しており、国分寺愛宕塚古墳もその中の一つに数えられます。平成24年度には、発掘調査を進めるために必要な現況平面図を作成しました。本年は、古墳の全長を明確にする調査を行い、基壇（墳丘一段目の平坦な面）を含めた墳丘長は81m、周溝を含めた全長が101.5mであることが分かりました。



国分寺愛宕塚古墳の位置



後円部付近の周溝の状況  
(南東から)



後円部に直行するトレンチ調査  
(東から)

## 市町教育委員会が実施した発掘調査から

## 3. 藤江古墳群（壬生町）－そば畑の地下から石室を確認－

藤江古墳群は、黒川東岸の台地上に築かれた古墳群です。現在までに壬生町の北端部から鹿沼市にかけて約20基の古墳が確認されています。

藤江2号墳は、そば畑の地下から発見された横穴式石室です。川原石を小口状に積み上げて造られた石室は、死者を埋葬する「玄室部」と石室に入るための「羨道部」とに分かれています。石室の全長は5mを上回り、壬生地内で発見される石室の中では大きい部類に属するものでした。石室が発見された当初は、天井石と思われる大きな石が玄室内に落ち込んでいたため、石の下から埋葬当時の副葬品が残っているものと想像されましたが、石室内からは土器のかけらも出土しませんでした。しかし、今回の発掘調査により、初めて藤江古墳群における石室の構造を知ることができました。



藤江古墳群の位置



藤江2号墳の横穴式石室



藤江2号墳横穴式石室羨道部

## 4. 雲雀台遺跡（下野市）－薬師寺城跡の堀を発見－

雲雀台遺跡は国指定史跡下野薬師寺跡と同じ台地上の南方約700mに所在し、北西約700mには中世の城館である薬師寺城を望むことができます。今回の発掘調査により、旧石器時代の黒曜石製の石器等が出土したほか、古墳時代前期から平安時代にかけての竪穴建物跡、中世の堀跡や地下式墳等が確認されました。堀跡は、調査区周辺に存在すると考えられていた薬師寺館跡の堀と考えられ、幅が8～9m、深さが約4.5mの薬研状（断面形がV字状）のものです。この堀跡が調査区ほぼ中央に東西方向及び台地西端部に南北方向にT字状に存在することから、少なくとも南北に2つの郭が存在することがわかりました。また、堀跡と同時期と考えられる地下式墳が4基確認されましたが、いずれも深さが2m以上もある県内でも最大級のものです。これらの中世の遺構は、出土した土器等から戦国時代後期のものと考えられ、薬師寺城よりも新しく、多功街道の整備に関連して城がつくられたと考えられます。



雲雀台遺跡の位置



地下式墳



堀跡

## 5. 琵琶塚古墳（小山市）－姿を現した巨大古墳－

琵琶塚古墳は、小山市の北、飯塚地区に所在する全長123mの前方後円墳で、その規模の大きさから下毛野の首長墓と考えられています。

今回の調査は、国史跡の整備事業に先立ち、古墳の現況調査と遺構確認のため実施したものです。

調査の結果、墳丘をめぐる堀や堤を確認しました。墳丘のくびれ部の調査では、そのテラス面からおびただしい量の埴輪片が見つかり、その下から埴輪列が調査されました。保存状況も良好で、埴輪は寄り添うように隙間なく立てられていました。埴輪列が調査された墳丘第一段は黒色土、ローム層からなる自然堆積層です。このことから、古墳の第一段及び内堀・中堤・外堀は地面を削り出し成形したことが、わかってきました。古墳の両側は、開折谷となっていることから、古墳は幅200mほどの狭い尾根状の地形を利用し築造されたものと考えられます。



琵琶塚古墳の位置



琵琶塚古墳全景（東上空から）



円筒埴輪列

## 出前授業 石橋中学校へいってきました。

私たち埋蔵文化財センターでは、教育普及活動として小・中学校に出向いて「出前授業」を行っています。社会科（歴史）授業をはじめ、総合的な学習やクラブ活動など、様々なリクエストに応じています。

ここでは下野市立石橋中学校が企画した「縄文時代のものづくり」をテーマとする総合的な学習への協力を紹介します。

### 縄文時代の講話（7月9日）

「縄文時代のものづくり」をテーマとした「ゼミ」には男子27名女子6名の計33名の生徒が集まりました。



まずは縄文時代の概要を説明しました。これからの学習に先立ち、当時の生活についての理解を深めてもらいます。



縄文土器や土偶の実物を手に取りながらの授業に、多くの生徒が関心をもってくれたようです。

### 土偶作り（9月16日）

土偶は日本列島の縄文文化に特有な「女神像」のようなものと考えられています。代表的な土偶の制作例を紹介したのち、表・裏・側面の実寸大写真を配布しました。また作りやすいようセンターで作った見本も用意しました。



あんまり似てないんじゃない？

使い慣れない粘土に悪戦苦闘しながらも、それぞれの思いが込められた土偶が完成していきました。

### 土器作り（9月24日）



縄文土器の年代や用途を再学習した後、作り方を説明します。煮炊きを使うことを考えると、水漏れしないようにしっかりつくらないと・・・

- ①粘土の球を潰して円盤状の底部を作ります。
- ②底部の径に合わせ「粘土紐の輪」を積み上げていきます。つなぎ目をきちんと密着させます。
- ③最後に形を整え、縄文を付けたり、粘土紐を貼り付けるなど装飾を行い、完成となります。

### アンギン編み体験（10月8日）

カラムシなどの植物繊維を使って、スタレや俵と同じ方法で編んだ布が「越後アンギン」と呼ばれ、明治時代まで新潟県の一部で使われていました。縄文時代にも同様の編み布があったことが、土器に付いた痕跡などから判っています。

※編み布の材料は、野生種のカラムシが用意できないため、縄文時代にも栽培されていた麻を用います。



### アンギン編み

横糸に縦糸を絡めながら1段ずつ編み上げます。



ビデオカメラを使い、手元の様子を拡大してモニターに映し出しました。

### 土器・土偶の焼成（10月21日）

約1ヵ月間乾燥させた後、学校の敷地内で野焼きを行いました。



2時間ほどかけ、少しずつ焚き火に土器を近づけ、ゆっくりと乾燥・加熱させます。



乾燥・加熱の後、大量の薪をくべ、炎を上げて一気に焼き上げます。



30分ほど炎の中で焼いたら、薪を追加せず自然に火が消えるのを待ち、完成となります。

### 学園祭（輝石祭）での展示（10月25日）

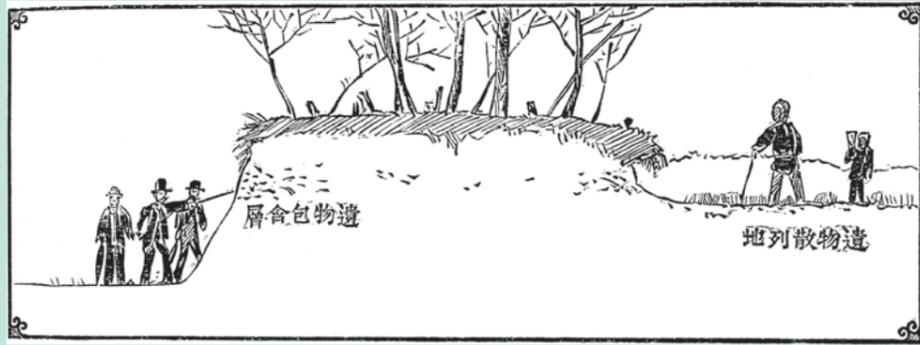


作品は一人一人の感想を沿えて展示されました。割れたものは、今回一つもありませんでした。

# 特集

# 地面の下の遺跡

遺跡の多くは土の下に埋まっています。遺跡の発掘では、遺跡形成と逆の手順で調査を進めます。



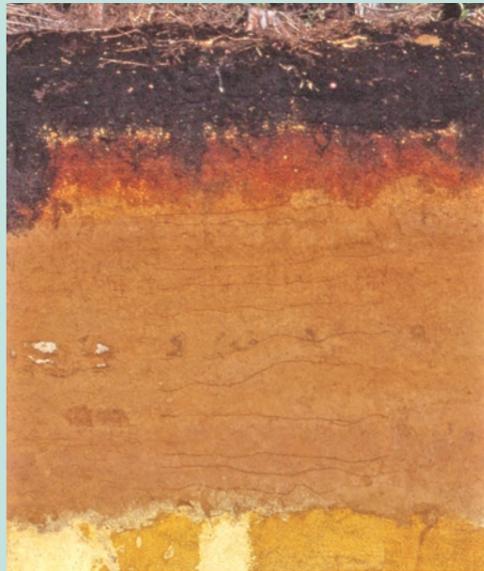
「遺物包含層」と「遺物散布地」の命名の図

大野延太郎・鳥居龍蔵, 1895, 「武蔵国北多摩郡国分寺村石器時代遺跡」『東京人類学会雑誌』第10巻第107号 より転載

明治27年、東京郊外国分寺村（現国分寺市）で、縄文時代の土器や石器が土中に埋没していることが確認されました。それまでは、過去の遺物も地上にあると考えられていました。

## 関東ローム層

地質学で第四紀更新世と呼ばれる時代（258万年～1万7000年前）、火山が頻りに噴火し、多量の火山灰が降りました。関東地方の台地は、この火山灰を主体とする「関東ローム層」が積もっています。



高根沢町荻ノ平遺跡 土層断面

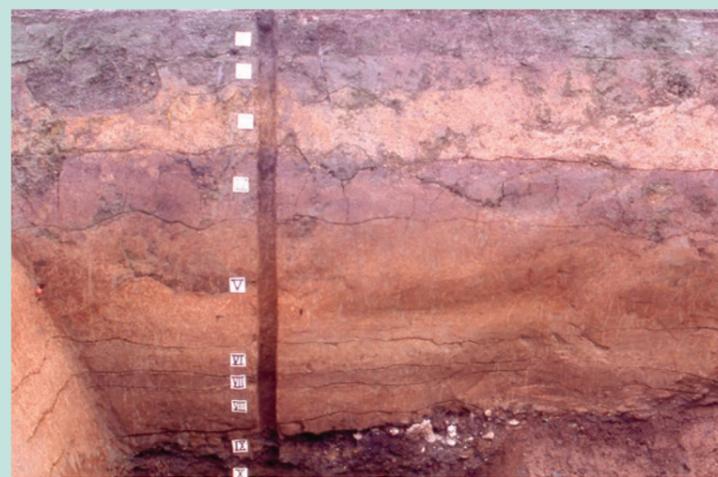
## 黒ボク土

完新世（1万7000年前以降）になると火山活動が衰え、植物が繁茂するようになります。関東ローム層の上に堆積した黒色の土層（黒ボク土）は、火山灰や腐食した植物が混じって形成されたと考えられています。

今から約40,000年前、赤城山が噴火して積もったのが赤城一鹿沼テフラ、すなわち園芸用の鹿沼土です。

現在日本列島で確認されている人類が活動した痕跡は、最も古いもので約4万年前と考えられています。

川沿いの低い土地などでは、河川が土砂を運び込みます（沖積作用）。礫（川原石）や砂、あるいは粒子の細かい粘土などが積もっています。



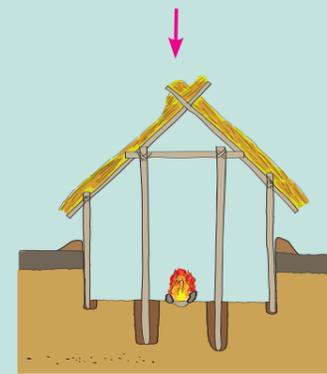
上三川町五霊遺跡 土層断面

## 遺跡の形成（縄文時代の例）

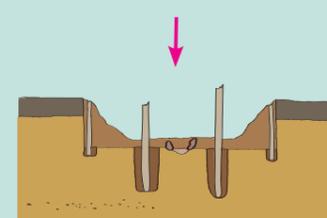
縄文時代には、ローム層の上に、黒ボク土が少し積もっていたと考えられます。



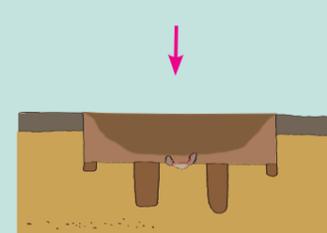
地面を掘って竪穴住居を作ります。黒ボク土の地表面から掘り下げ、床面はローム層に達します。



竪穴住居が廃絶され、住居跡の窪地に土が積みはじめます。積もる土は黒ボク土です。



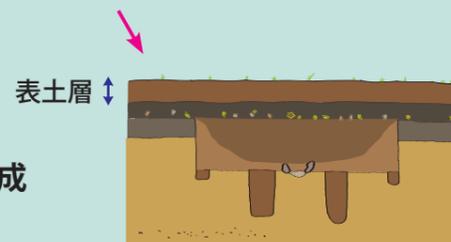
住居跡の窪地が完全に埋まります。



## 遺物包含層の形成

黒ボク土中に、土器や石器などが層をなして含まれていることがあります。これを遺物包含層と呼びます。どのようにして形成されたか、詳しいことは判っていません。自然の営力、あるいは人が行った何らかの活動によるものかもしれません。

## 表土層の形成



## 発掘調査の手順



旧石器時代の調査（旧石器時代の遺物がある場合は、出土遺物の位置、出土層位および降下火山灰を確認しながら、ローム層を掘り下げます。）



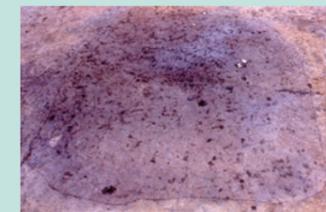
竪穴住居の完掘



土層断面の観察（土層観察用の土手を残して掘り下げ、土層断面図を作成します。）



遺構の調査（遺構の埋没過程や構造を記録しながら、埋積土を除去します。）



竪穴住居の確認（地面を平らに削って、土の色の違いを見つけます。）

遺物包含層の調査（遺物の出土状況を確認しながら掘り下げる。）



表土層あるいは遺物を含まない層（無遺物層）の掘り下げ

## 埋蔵文化財センター普及事業の紹介（2）

### ◇図書館での展示◇

埋蔵文化財センターでは、展示施設（博物館や資料館など）以外の公民館、学校、百貨店などで、出土品の展示を行ってきました。昨年からは新たに図書館での展示を始めました。



展示ケースに埴輪を展示



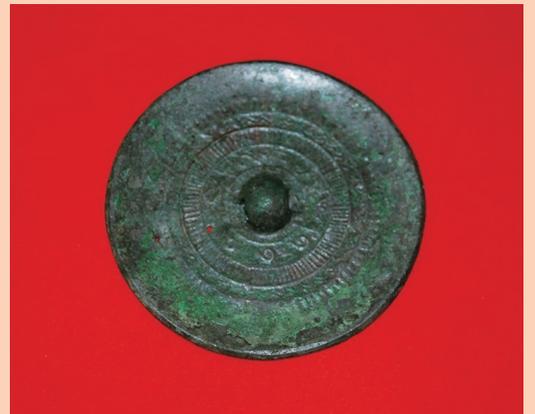
通路脇の展示ケース

本来展示を目的としていない施設では、さまざまな制約があります。今回は、奥行き25cmの展示ケースを使うことになりました。大きな甕などは並べることができませんので、装飾品や小型の土器が中心となりました。ポーズをとった女子人物像の埴輪がぎりぎり入り、展示に花を添えました。

### 地域に密着した図書館—宇都宮市立南図書館—

宇都宮市立南図書館は、周辺の宇都宮市雀宮地区、横川地区の特色を生かした様々な活動を行っています。この地区は遺跡の宝庫で、インターパーク地区など、多くの発掘調査成果があります。

今回は、「田川中流域の古墳文化」をテーマとしました。



西赤堀遺跡出土の古墳時代の鏡

### 展示内容と合わせた講演会を実施



講演会の様子

画像を使って発掘調査の様子を分かりやすく伝えました。また、この地域の代表的な古墳を取り上げ、移り変わりを説明しました。

この日は、出土品は展示ケースから取り出され、目の前で解説となりました。